

平成28年度 郷土館資料移動展

ふしぎなはく製の魅力展

郷土館2階には多くのはく製が展示されています。しかし、展示スペースの都合により、倉庫に保管しているはく製もあります。

今回の移動展では未公開のはく製を展示するとともにはく製の特徴や魅力について紹介します。

会場は下記のほか、沼幌小学校でも展示予定です。ぜひお越しください。



↑ゴマファザラシのはく製
ニワトリのはく製↓



展示会場・期間

- 開発センター
1月26日(木)～2月1日(水)
- 虹別酪農センター
2月2日(木)～8日(水)
- 磯分内酪農センター
2月9日(木)～15日(水)
- 茶安別公民館
2月16日(木)～22日(水)
- 図書館
2月23日(木)～3月1日(水)

大川のほとり

—郷土館だより(第72号)—
☎487-2332
開館時間
午前9時30分～午後4時30分

郷土館より
一筆啓上

昨年の夏は台風の上陸による増水被害、初冬は寒気により極端に早く塘路湖・シラルト口湖が結氷するなど、自然に振り回された1年でした。今年は穏やかな年となるよう、祈らずにはおられません。
(坪)

くまがやま

標茶の昆虫博士 飯島一雄氏を悼む

昨年11月7日、飯島一雄さんがご逝去されました。飯島さんの功績は多々ありますが、やはり「昆虫博士」「トンボ博士」と呼ばれ、昆虫の研究者として釧路湿原を中心に道東の昆虫相を解明したことが、最もよく知られています。昆虫研究と並行して本町の文化財保護にも大変尽力され、郷土館の設置やその後の運営にも深く関わっていただきました。今回は飯島さんと郷土館とのつながりについて触れたいと思います。



北海道博物館協会表彰を受ける
飯島さん(平成13年)

郷土館の大きな目玉となっている3312点にも及ぶ昆虫標本展示室「飯島コレクション」は、飯島さんが中心となり展示整備が行われ、自身の昆虫標本と共に、一般の方にもっと昆虫を知ってもらうための、手作り展示解説パネルが設置されました。「チョウとガの違い」や「クワガタ・トンボ・スズメバチの体の構造の違い」などの解説パネルは現在も展示しており、飯島さん独特の軽妙で楽しい解説文を見ることが出来ます。

また飯島さんは、本町の文化財保護においても大変活躍されました。その一つが破壊される遺跡からの遺物採取です。昭和30年代後半、五十石で砂利採取が行われる中、飯島さんは採取現場で特徴的な遺物を発見しました。当時、釧路市立郷土博物館の学芸職員だった澤四郎氏に遺物を見せたところ、それは貴重な石刃鏃文化の遺物でした。砂利採取工事の中止は難しい状況であり、発掘調査が行われました。しかし調査区域外の現場からも遺物が発見されると、飯島さんは毎朝現場に行き、破壊から守るため遺物を採取しました。その遺跡は現在、二ツ山遺跡第1地点と呼ばれ、遺物

地元

の人は

釧根を取り上げた作品たち(小説編)

不定期コラム

コレを読め!! 第1回

郷土館職員が北海道を題材にした「お勧め本」を紹介します!

『凍原』

著者 桜木紫乃

～「少女は刑事にならなければならなかった。」～

冒頭に1人の少年が釧路湿原で失踪する事件が発生します。この事件をきっかけに、登場人物たちの人生は大きく狂い始めるのです。

たった1人の弟を失った主人公・松崎比呂は、女性刑事として釧路に戻り、そこで起きる1つの事件を解明していきます。作品冒頭で失踪事件を担当したベテラン刑事・片桐周平と共に、釧路川とその支流である阿歴内川がぶつかる「二股」で、絞殺死体として発見された「青い目を持つ男性」の謎を追っていく…。というのがこの物語の本筋となっています。ここで、物語の謎に深く関わってくるのが「釧路湿原」と「樺太」です。戦時中の回想と現代の捜査を行き来し、後半に畳み掛けるようにひもとかれる謎。桜木紫乃さんの読みやすい文章と表現で、重いストーリーでも一気に読めることでしょう。

という訳で、第1回お勧め作品は桜木紫乃さんの「凍原」です。



図書館でも貸し出しています。
(写真提供・図書館)



標茶町内の遺跡を案内する飯島さん
(平成15年)

の一部は「標茶町二ツ山遺跡第1地点出土品273点」として本町の指定文化財になっています。
自然の分野においても昆虫だけではなく、本町の天然記念物に指定されているキタサンシヨウオオの生息を確認したのも飯島さんです。昭和52年、越冬昆虫の調査中にキタサンシヨウオオを発見した飯島さんは、釧路市立博物館報に発見の経緯と状況を報告し、今日の保存に至る流れを作り出しました。以上のように、本町における自然・文化財保護活動の中心的な役割を果たしました。

私(郷土館学芸員・坪岡)自身が最後に飯島さんとお会いしたのは、昨年の8月18日でした。飯島さんは少し痩せられたように見えました。いつも通りに日本手ぬぐいを頭に巻き、笑顔で迎えてくれました。この時は、これから郷土館の展示を一新していきたいと考え、その中に飯島さんの業績について触れた顕彰コーナーを作りたいと思い、相談に伺いました。相談する中でインタビュも面白い、お話を録音しながら、改めて昆虫との出会いや研究への情熱、未来の標茶の子どもたちに伝えたいことなどを教えていただきました。飯島さんは「郷土館にある昆虫標本が自分の一番の宝です。それを見て子どもたちが昆虫の素晴らしさに気付いてくれたら、それが昆虫を捕り続けてきた事への贖罪になる」とお話されていました。私が「最後に2人で記念写真を撮りましょう」と言うと「いや、今の姿なら撮られたくないやあ」と苦笑い。「じゃあ、元気になったらまた写真を撮らせてくださいね」それが別れの言葉になってしまいました。

昆虫研究者としての功績のみならず、本町の文化財保護と郷土館運営の基礎を築いた飯島一雄さん。最後のインタビューの音源は大切な宝物になりました。大きな感謝とともに、謹んで心より深く哀悼の意を表します。

※昆虫相とは：地域の昆虫を発見し分類すること